

社会科学の場所論的考察

川久保勘三郎

Kansaburo KAWAKUBO

は し が き

ここに場所とは歴史的現実的世界の自己限定を意味する。だから場所論といえは世界の論理のことである。この意味の世界は形式論理的に定立された世界でなく論理即事実というべき世界である。しかしこの意味の世界の説明から直線的に社会科学にアダプトすることは困難である。ただ社会科学展望の立脚点となるにすぎない。ここから社会科学への道は迂曲の長き道程を辿らなければならないであろう。この小論はその序曲にすぎない。

世界構造の原理

(A) 主 体

普通にわれわれが学問をしたり物を考えたりする場合には自分を対象化して自分自身を吟味することよりも研究の対象はあくまで対象物であつて客体的・対象的存在物として取扱つているのである。だが主体というものはいかにしてもこれを対象化し客体化して物の存在のようなものとして見ることはできないものである。したがつて心を対象的・客体的に取りだして物と心とを或は心と心とを相互に比較して一般的な類概念を作つてその類概念の下に心の一般構造を考えることはできない。心は私自身である。単なる私ではなくて真の意味で私の自性をなしているものである。この私の自性を失えば私はもはや真の私ではないことになる。私すなわち我とは真の我にまでなろうとするものである。真の意味の我になることは真の意味の我を自覚することである。もし真の意味の我になれないとすればそれは自己を失つたもの自己でない他のものになつてしまうことになり自分が自分でなくなるのであるからそれは我にとつては自らの死であるといわなければならない。「必の本質が心理的なるものに対して特に精神的と呼ばれるとき我々はそれに単なる表象や感情や衝動的意欲の渾沌たる流れを意味しないでそれらのものを貫いて何等かの価値に対する要求の自覚が支配していることを意味する。価値関係的な心のはたらきそれを我々は特に精神と呼び慣れているのである。内なる働きはそこでは何ものか願はしき姿、求むるに値する形、当にあらしめらるべき相を深い情熱と高い憧憬とを以て内面に於て見つめつつその実現を要求する。アイデアを見つめつつ努力する心それが精神的なのである……」(木村素衛氏表現愛P.5.)ヘーゲルも精神は世界をその地盤とする表現的精神として把握しているが表現は価値を見つめつつ自己限定をすることである⁽¹⁾ とういう意味で心はよく言われるようにパトス的である。すなわち感ぜられる存在である。しかし心はただ私達に感ぜられるばかりでなくその存在の筋道を客観的にもつものである。心は真の意味の主的存在であつて常にそれは真の我にまでなろうとするものでありかように真の我になろうとするところ却つて又真の我になれないという矛盾が起る。それは我にとつては生死の矛盾の中く陥ることであり生を求めて却つて死に撞着するというような苦しみの中へ落込むことである。生

死を越えた生でなく生死の生に執してそのため却つて死に追いかけられるような形になることである。生死という互に矛盾したものの真只中に落ち込むことである。それは生死の矛盾、一多の分裂、内外の撞著、可能と必然との矛盾に陥ることである。可能というのはここでは我が真の主体として我れになれる自己の自性に到達できるということの可能性の意味であり、それに対してどうしても真の我になれないという必然性が矛盾する。或は有限と無限との対立或は瞬間と永遠との矛盾という関係が主体的存在について現われてくる。我になろうとすることと我になれないとの関係は恰も我々が深い沼池にはいつたとき右脚を上あげようとすればさうするほど左脚が深く底にはいつてゆくようなものである。「方角を失つて迷うものは方角によればこそ迷うのであり、もし方角のないところにあるならば別に失うこともなく迷うこともない。本覚に依るが故に不覚あり無明の性は覚性をはなれず……」(岩波文庫本大乘起信論宇井博士訳, p.27) 心は真の意味で主体的であればあるほどかかる両極の矛盾に撞著するのである。この両極の矛盾は無限切断という言葉で現わしてみることができると思う。この両極の矛盾は如何にして綜合されるであろうか。人間は死を先得しているといふ言われる。出生と同時に死を負っているのである。いかに生きようとしても必ず死ぬ有限者である。その危機的深淵に蔽を被せる日常の安易化は真理を蔽う虚妄である。自己が自己になる力の弱さは決して悪徳とはよばれないであろう。しかし実際において自己が自己になり得ぬ精神の弱さは百の悪徳千の悖徳の母胎をなしているのである。この世に生れながらの悪人という如きものがある筈がない。彼等はただ自己が自己になり得ぬ精神の弱さを負うがために自ら苦み悩みその苦しみを逃避しようとする余りに次から次へと悪徳を重ねてゆくのである。しからば真に生きる道は何であろうか。真に生きる道は死ぬことである。死の先取・罪惡深重の深淵の自覚即ち自己の有限性の自覚でなくて何であろうか。貞享甲子秋八月芭蕉は四十歳にして野晒しを覚悟につきつめたおもいをいだいて西への旅に向つた。深川の仮庵を出るときの句「野晒を心に風のしむ身かな」野晒を心にするとおもいはひとむきに曠野のはてにさらされている自己の白骨を見る思いである。それは彼のゆきつくところにほかならない。彼は彼の生きるはてを見た。しかし彼はこの悲愴な旅の中にあつて次第に彼も生きてゆけさうな世界のあることがわかつてきた。この旅の途中で出来た「冬の日」の冒頭の言葉「傘は長途の雨にほころび紙衣はとまりとまりのあらしにもめたり、佗びつくしたる佗び人、われをさへあはれにおぼへける」「死にもせぬ旅寝のはてよ秋のくれ」「年くれぬ笠きて草鞋はきながら」旅寝のわび姿のままにふりかへつてみられるほどになつたがしかし彼は旅の草鞋をぬがうとはしない。広い世界へ出れば出たで一層深くされた自分の底をみようとして旅をつづける。「奥のほそみち」には「月日は万代の過客にして行きかふ人もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ馬の口をとらへて老ひをむかふるものは日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり……」とある。日々旅にして旅をすみかとするものにして初めて旅を自己の死場所にする覚悟が出来る。所詮旅に死ぬよりほかに死場所をもたないものにとつては旅は淋しく懐しい。この芭蕉の有限の自覚は生をゆきつくすことすなわち死んで生きるということではなからうか。一つの極に主体的になりきつてしまうということによつて却つて他の極に通ずるといふこと、すなわち生死

の両極は無限切断であつて何の共通性もないに拘らずむしろその故に同時に結びつくということであらう。生死の中の生として死と対立する生はまだ生が生になりきつたのではない。絶対の生とは生死を共に越え、それをその中に包むところの生である。この生は生死をその中に包む故に死を拒む生ではなく却つて死中にある生ともいへる。真に生を知るとは生死の結合を知ることである。生と死の無限切断が深ければ深いほど却つて同時にそこに結びつきがあるということになる。かくの如き論理は無智の智の方法によつて明かになる。無智の智とはいかなるものであるか。無智の智の中から無智の智の出て来る筈はない。その智は明かに無智の中からでなく無智を越えたものから来るのである。自己の中で自己を知り得ないが故に彼は真実の無智なのである。しかし無智の智が成立するとき彼が自らについて無智者以外の何ものでもないことを知るのであるから、彼はそのときに真実無智の底へ墮ちなければならぬ。もし墮ちないというならば、その智はいつわりであらう。その智が真実であるならば彼はどうしても無智の底へと墮ちねばならぬ。そして無智の智の底へ墮ちたときに彼は却つて無智の智に到達するのである。即ち自分の底へゆきつくすと同時に無智の智として浮び上るのである。⁽³⁾ かくして主体はパトス的であると同時にロゴス的である。感動の主体であると同時に道理の主体である。

(B) 瞬間、永遠、世界、深淵。

主体は無限切断が同時に結合であり結合が同時に無限切断であるならば「同時」とは一体いかなるものであらうか。同時は主体的の意味に於てこれを瞬間と呼ぶことができる。瞬間は絶対矛盾の両極が同時に自己同一であるという場合の同時が世界内限定として主体的に現実性をもつてくるときに、この同時が先づ瞬間として規定されるのである。そうして瞬間がどうして現実的に可能になるかという、この瞬間が世界の中にあるということによつて可能になるのである。一体何故瞬間というようなことをいうのかといえば主体的な心の存在というものは瞬間毎に無限切断とその結合に直面しているからである。主体は矛盾とその結合とを瞬間毎に行つてゐるものである。心は瞬間における矛盾と矛盾のままにして、しかも矛盾が消されているその自己同一とを放棄することは出来ない。放棄すれば真の主体になれなくなる。すなわち心は瞬間毎に可能性と必然性の矛盾を総合し、この総合の結びつきが瞬間の意味になるのである。かく考えてくると人間は真の意味の主体として真の我の心において見れば瞬間的存在であるといえる。ところが瞬間のあるところには必ずこれを包むものがなければならない。何故かといえば瞬間というのは瞬間毎に矛盾に陥り自己自身を失うものであり瞬間は瞬間毎に死んで行くものであるが、それにも拘らず瞬間の実連続が成立するためには、どうしても、それを包むものがなければならないということになるからである。ライブニッツよりアルノへの手紙第九、「パリーに行つたのは私であるが今ドイツにいるのも私であつて別人ではないと本当に云えるのは又アプリオリの（私の経験に依存しない）理由があるからに違いない。従つて私の概念がこれらの異つた状態と結合し若しくは包含しているに違いない。でなければそれは同一の個体ではなくてたださう見えるだけだと云えることになる。又実際、実体や個体的存在即ちそれ自ら存在するものの本性を十充知らなかつたために本当は何物も同じままではないの

だと信じた哲学者もある……」(河野与一氏訳ライブニッツ・アルノー往復書簡 P. 106)ここに包むというのは風呂敷で書物を包む場合のように或物が他の物を包むという意味ではない。ライニッツが不連続の連続が経験から来るのではないというのは、それが場所的限定を持たない対象的事物の限定から来るのではないというのと同様な意味である。経験に依存しない即ちアプリアリであるというのは事実をはなれた一般という意味ではなく事実が事実を場所的に限定する義である。事実と事実とが互に包み包まれる構造聯関を意味するのである。そこで瞬間的時間を包む永遠といつても動いて行くものとはなれてそれと全く別に存在する動かない時間の如きものではない。一体時間は同時の現実的意味から導き出されたのであるが同時とは時間に属すると共に空間の規定にも属している。時間を単に継起相続する直線のように考えるならば如何なる時間点も同時にあるとはいわれな。しかし瞬間的時間は同時としての時間であつて、それはその中に同時を求める空間的世界との関係を含んでいる。ここにいう含むとは実はそれによつて包まれているという意味である。瞬間が世界の中にあるという意味は世界の根柢をなしているところの永遠に包まれ、それによつて実連続を形作るという意味である。即ち真の意味の時間とは瞬間毎に永遠に触れ永遠と触れながら瞬間から瞬間へ動く時間のことである。ところがこの永遠のあるところには同時に永遠を否定するものがある。永遠を絶対の生であると考えれば、この永遠を否定するものは死であり深淵である。世界とは永遠と深淵との綜合者である。世界自身がこのような矛盾の自己同一的綜合者として最も主体的な存在を持つていたのである。そうして私の心は、このような世界の中におかれているから、この世界のもつところの矛盾の自己同一的綜合者としての主体性格を自分自身に引きうけてくるのである。かように心が瞬間的存在でありながら同時に世界の主体的存在の中におかれ、それによつて包まれておると考えるときに心は真の意味での個体的存在となるのである。さうして世界は個体を包むものとして、その中に永遠と深淵との契機を蔵しながら、それ自ら矛盾の綜合においてあるものとして歴史的世界になると考えるのである。

(C) 個体と歴史的世界との関係

個体は真の自性にまで到達しようとするものであつて従つて又他面に於て真の自己になれないという自己の死とも撞著せざるを得ない存在であつた。かく心が自己になろうとすることは我を形成する働きである。しかし我が世界の中におかれているという意味に於ては我は絶えず世界の方から作られて来るとの意味を持たなければならない。例えば生と死というような問題も単に個体が自分自身を作ることから生じて来るのではなくして実は世界自体が生と死との綜合者即ち永遠と深淵との綜合者であるからこそ、その方から云わば行われてくるのである。世界から生れてくるものであるから、世界が担うところの永遠と深淵との矛盾の自己同一的綜合、生と死との無限切断の同時的綜合というようなものを自己自身に引受けてくるわけである。かように心の存在を単に瞬間的存在と考えるばかりでなく真に自己自身を作ると共に、このように自己自身を作る働きが却つて世界の側から作られてくると考えると、この自己を作ることと自己が作られることとの関係は歴史的・人間的になつてくると考へられるのである。何故かという元来ものを作るといふことは単なる自然

的事物の世界にあつては出来ないことである。単なる自然観念からは創造するとか建設するとかいう関係は出ない。世界が単に一般的自然に止まつていては何も生むことはできない。世界が個体を生み個体を作る個体として考えられる時にこれを人倫的社会と呼ぶことができよう。世界は人倫的社会に於て自己を個体化するのである。この人倫的社会というのは民族、国民の概念と同一である。民族の概念は色々問題はあるが、これを歴史的・人倫的な種的社会として考えるのである。この意味の人倫的社会を通さなければ世界は何ものも生むことはできない。一般的な人類の理念が無力であるのは世界が如何にして自分自身を個体化して来るかという民族性の規定を抜きにして見るからである。かくして人倫的社会の論理、国家の論理が考えられる。個体としての我が作るものと作られるものとの綜合者として規定される場合特に製作的、文化的方面を取出せば狭義の表現的世界が規定され、ここに主体、種的社会（民族、国家等）、表現世界が世界構造の三契機として考えられる。この三契機の具体的闡明を通さなければ社会科への道は開けないであろう。

参 考 文 献

- (1) HEGEL: *Phänomenologie des Geistes*.
 - (2) Alfred BAEUMLER: *Hegels Schriften Zur Gesellschaftsphilophie*.
 - (3) Nikolaus CUSANUS: *Vom Wissen des Nichtwissen*.
 - (4) DILTHEY: *Einleitung in die Geisteswissenschaften*.
 - (5) 西田幾太郎; 働くものから見るものへ
 - (6) 西田幾太郎; 無の自覚的限定
 - (7) 木村 素衛; 表現愛
 - (8) 務台 理作; 場所の論理学
-